



# 鏡としての天皇



小林 道憲

## 鏡としての天皇

### 天皇と国民の相互の映し合い

昭和六十年秋、宮中園遊会に招かれた高峰三枝子が、昭和天皇からお言葉をかけられたとき、感窮まってお返答することもできず、ただハンカチで涙を拭うばかりの様子をテレビが映し出していたのは、大層印象的であった。後の彼女の話では、昭和天皇からお言葉をいただいたとき、急に陛下の戦前戦後にかけてのご心労を思い出し、お答えするにも言葉にならなかったという。おそらく、そこには、同時に、彼女自身の戦前戦後にかけての苦労も二重写しになっていたに違いない。このような自己と天皇との一体化の感情は、ずっと以前からあった国民の心情であったのかもしれない。

あの敗戦の後、戦火に荒れ果てた国土の中で虚脱状態に陥っていた国民を励ますために、御巡幸を決意された昭和天皇は、全国各地を巡って、あるいは遺族や戦傷者を慰め、あるいは罹災者や戦災孤児達を励まし、あるいは原爆で傷ついた人達を見舞い、あるいは炭鉱で働く労働者に暖い声をかけて歩かれた。

### 戦いのわざわいうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ

という御製は、昭和天皇の当時のやむにやまれぬご心境をよく表現している。この昭和天皇のお心とお言葉によって、多くの国民が、あるいは慰められ、あるいは勇気づけられ、祖国復興への希望をもつことができた。すでに語り尽されてはいるが、戦後のわが国の復興に、この昭和天皇の果たされた役割は、大きなものがあったと言わねばならない。

ある引き揚げ者未亡人は、昭和天皇の暖いお言葉をいただいて、戦争で夫をなくし子供達を失った悲しみも癒され、日本再建のために頑張る勇気が湧いてきたという旨の手記を残している。また、長崎の原爆病院で陛下のお見舞のお言葉を受けた永井隆博士は、敗戦でバラバラになった国民の心が、陛下がお歩きになると、あとから万葉の昔にかえったように再び結び合わされていく、というような感想をもらしている。このような国民の心情に対して、昭和天皇はまた次のように詠われてもいる。

わざわいをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ

ここには、天皇が、国民の悲しみや希望など様々の感情を己が心にそのままに映しとり、その天皇のお心によって映し出された悲しみや希望を、また、そのままに国民が映し受けるという関係がみられる。そのような天皇と国民の間の相互の映し合いというところに、わが国が維持してきた統治者と被統治者との関係があったのではないか。昭和二十一年元旦の詔勅は、いわゆる「人間宣言」と俗称されているが、そこでさえも、天皇と国民との紐帯は終始相互の信頼と敬愛によって結ばれてきたという表現がみられる。ここにも、この天皇と国民の相互の映し合い、つまり君臣の呼応という古来のわが国のあり方が表現されている。

### 天皇は鏡である

天皇は、いわば、国民のあらゆる行動、表現、心情をそのままに映しとる〈鏡〉なのである。国民は、また、その〈鏡としての天皇〉に映し出された自分達の姿をみ、そこで、国民と国民、国民と天皇がひとつになる。天皇は、そのように一見バラバラに見える国民の様々なあり方を、鏡として映しとるという行為によって、国民をひとつに結び合わす役割を果たし、自らも国民とひとつになる働きをしている。いわば、天皇において多は一になり、また、天皇から一が多となって現われるのである。それは、陛下が園遊会などで各界の代表者と会われ、お言葉をかけられるとともに、代表者の話を誠実にお聞きになるというようなことにも現われている。

このようなことは以前からの皇室の伝統でもあったのであり、例えば、それは、歌会始の構造にも現われている。天皇が、多くの歌となって表現された国民の心情をお聞きになり、それを自らの心の中に映し出され、そしてまた、自らもそのお心を歌い返されるというのが、歌会始の儀式なのである。これも、多様なものを統一する〈鏡としての天皇〉の役割の表現のひとつと言ってよいであろう。実際、勅撰和歌集が何度も編まれ、天皇から庶民に至るまでの様々の歌が等しく収集されたことがあるように、それは日本の伝統だったのである。

文化的面ばかりでなく、天皇は、当然、政治をも映し出す鏡である。今まで多くの権力者が登場してきて、国民を統治してきたが、天皇はいつもこの統治の精神的源泉でありつづけ、これを見守ってきた。明治憲法第四条の「天皇ハ統治権ヲ総攬ス」という規定は、昔から天皇が政治を見守ってきたという伝統に適う表現であった。しかも、天皇は、政治ばかりでなく、軍事、宗教、文化、芸能、国民生活すべてを明鏡のごとく映し出し、これを総攬するものだったのである。

神代の昔から歴代天皇が最も大切なものとして守ってこられた三

種の神器は、八咫鏡と草薙の剣と八咫瓊勾玉であるが、この中で最も重要なものは、八咫鏡である。『古事記』によれば、この鏡は、天照大神が天孫瓊瓊杵尊に「我が御魂として斎きまつれ」と言われて、授けられたものだと言われている。とすれば、なるほど、八咫鏡と天皇は必ずしも同一ではない。正確に言えば、天皇はこの鏡を祀る祭司であって、両者を同一視することはできないであろう。しかし、国の始まりの源泉として表現された天照大神の魂は、天孫瓊瓊杵尊を通して歴代天皇の中にも宿っていると解釈することができるから、この鏡としての性格は、そのまま生きた現実の天皇の心の中にも宿り移っているとみななければならないであろう。

三種の神器の中の剣と勾玉は、それぞれ、政治や軍事つまり〈権力〉と、学問や芸術や宗教つまり〈文化〉の象徴であり、この両方を映しとるということによって統一しているのが鏡である。しかも、この鏡としての性格が天皇自身にも乗り移っているとすれば、天皇は、いわば政治、軍事、学問、芸術、宗教すべてを含む日本人の生き方、つまり日本人の生の様式、あるいは日本文化の全体性を映す鏡だということになる。そのことによって、天皇は日本文化を統一し、それを象徴し、表現する。天皇は、単なる政治概念だけからは捉えられない。天皇は、それを超える広い意味での文化概念なのである。

### 無私 of 天皇

天皇が、そのようにあらゆるものを映す明鏡のごときものだとすれば、天皇の精神は、また曇のない無私 of 精神でなければならない。そして、この精神は、生きた現実の人格としての天皇が絶えずそれに向かって修養を積み、自らの心を磨いていかねばならない目標でもある。歴代天皇は、これを、祭祀の励行や敷島の道つまりお歌の修業によって実践されてきた。事実、この無私 of 精神は、歴代天皇によって営々として受け継がれてきた心であった。

例えば、よく例に出されることではあるが、延喜の御世、醍醐天皇は、雪降る寒さの夜、諸国の民はいかに寒からんとて、御衣を脱ぎ、民の上を偲ばれたという。また、元寇の折、龜山天皇は身命に代えて国難撃攘を祈願され、また、戦国の世、後奈良天皇は、人心が乱れ疫病が流行するのを憂えられ、『般若心経』を一心に書写されたうえ、その奥書に、「朕、民の父母として徳覆う能はず、甚だ自ら痛む」と記されている。それほど遠い時代でなくとも、例えば、明治天皇は、大津事件で傷つけられたロシア皇太子を自ら護衛され、かつ、身の危険を冒してまでロシア艦艇に赴かれ、皇太子慰撫に努められた。

昭和天皇の終戦の御聖断も、自己放棄によって国民の苦しみを救

おうとされた無私の精神の現われであった。

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

という御製にも、その御心境は現われている。そして、その自己犠牲の精神は、実際、後のマッカーサーとの会見において、戦争の全責任をすべて御一身に背負われ、身柄を連合軍の判断に委ねるかわりに、飢えた国民の救済を請願された捨身の御行為となって実行されている。また、国民への激励のために、ほとんど命懸けと言ってもよい三万三千キロ、足かけ九年にも及ぶ長い御巡幸の旅を、自らの発案で実行されたのも、その現われであった。特に、昭和天皇は、戦前戦後にわたる苛酷な日本の運命をそのただ中で経験され、それを乗り越えてこられたという意味で、ほとんど悟りの境地に近い曇のない清明心をもたれておられる。この明鏡のごとき無私の精神が、歴代天皇の精神だったのである。

天皇は、決して、一部で言われ、外国人にも時折誤解されているような〈独裁者〉ではない。もしも、天皇がその恣意によって国を左右してきたのならば、天皇制はもっと早くに滅んでいたに違いない。歴代天皇が、清き明き心の中にあらゆるものを映しとり、私心のない統治をされてこられたがゆえに、天皇の系譜は連綿として続いたのである。しかも、この〈鏡としての天皇〉のもとで、争乱と和平、復古と革新、闘争と和解、すべてのものがむしろ自由に表現されていたとも言えよう。天皇は、国民のあらゆる営みを映し出すということによって、国民ひとりひとりを結びつける力を発現する。天皇は、そのようにして、いわば国家という花の芯の役割を果たしている。芯がなくなれば、国民という花びらはバラバラになってしまうであろう。

### 国民意志の統合

天皇が国民の意志を統合する力をもつのは、そのように、あらゆるものを映す鏡として、国民と国民の間の紐帯、精神の結び目の役割を果たしてきたからである。天皇が、そのようにして結び目の役割を果たしてきたがゆえに、国家の同一性は保たれてきた。そして、これが拠り所になって、国家は共同体として安定する。天皇は、日本にとって、そのような安定性の原理なのである。しかも、この国民の統合された意志は、単にバラバラの勝手な意志ではなく、昔から培われてきた言語や習俗、歴史や伝統、文化や宗教などによって形づくられてきた共通意志でもある。この共通意志、あるいは一般意志の象徴として、天皇は存在する。その点では、和辻哲郎が、天

皇を、日本という文化共同体の全体意志の表現と規定したのは、天皇の本質をついていると言えるであろう。

この天皇という精神的権威が国家の中心として存続してきたから、実際の政治権力も、そこから支配の正統性根拠を得て、政治を行なっていくことができた。それは、歴史的に、古代から現代に至るまでの日本の伝統であった。藤原氏や平氏、鎌倉時代の源氏や北条氏、室町時代の足利氏、江戸時代の徳川氏、明治の薩長藩閥政府、すべてそうであった。戦前の軍閥政治においてさえその点は変わらず、戦後の自民党政府も同じことを踏襲している。今日の自民党政府も、一面では、征夷大將軍のお墨付をもらって実際政治を握ってきた武家政治と同じような構造をもっている。

歴史的にみて、天皇の位まで侵そうとするものはほとんどなかった。それは、天皇自身が決して実権を握った権力者ではなく、むしろ、政治も文化も共に映す精神的権威だったからである。貴族政治から武家政治、明治以後の近代政府に至るまで、すべて天皇を利用してきたと言われるが、逆に言えば、天皇にはそれだけの利用価値があったのでもある。天皇は、共同体の一般意志の象徴として、国民統合の役割をその精神的権威によってのみ行なってきたから、それを侵すよりも、利用する方が早道だったとも言える。

戦後数年のマッカーサーによる支配でさえ、ある意味で、天皇の権威を利用してきたと言ってもよいであろう。GHQの占領政策が成功しすぎるほど成功したのは、逆に、天皇制が最小限ではあるが護持され、天皇が側面から国民統合の役割を果たしてきたからである。その意味では、おかしなことだが、マッカーサーは、ある時点から、天皇の臣下に逆転してしまったというような面さえみられる。マッカーサーは、天皇の請願を体して、アメリカからの食糧の緊急援助を、その名誉にかけて約束したりもしている。

天皇がそのように国民の意志統合の役割を果たしてきたことは、日本の歴史の中で一貫して変わることがなかった。たとえ、戦国時代のように、政治が乱れ政治権力の所在がわからなくなってしまう時でも、この天皇という政治的中心は壊されなかった。幕末の危機においても、敗戦の危機においても、これは壊されることなく、逆に、天皇が危機克服のために前面に押し出されてきたのである。古くは、〈国家〉という言葉が、日本ではそのまま〈天皇〉を意味していたのは、そのように、変わることなく、天皇が日本という共同体の一般意志を代表し、それを統合していたからであろう。

反天皇論者の方では、天皇制を、例えば封建絶対君主制とかブルジョア天皇制などと規定して、これを打倒する論陣を張っているが、天皇制は、封建体制や産業ブルジョア社会ができる前から存続していたのであり、決して、これは封建時代の遺物でもなく、ブルジョ

ア社会の擬制でもない。もしも、そのようなものとして捉え、天皇制を打倒しようとするなら、彼らの幻想としてつくられた封建絶対君主論やブルジョア天皇制論だけが打ち倒され、本来の天皇制は残ってしまうという結果になるであろう。しかも、マルクス主義的な紋切り型の概念から天皇制をいかに捉えようとしても、どうしても捉えきれない部分があることにすでに気づいているのは、他ならぬ吉本隆明をはじめ新左翼の論者達自身なのである。

### 権威と権力の二分

国家論的な観点から言えば、わが国は、国家において必要な権威と権力、あるいは徳と力の二部分を、天皇と権力者の二つでもって分業するという二元的政治形態をとってきたと言えよう。北畠親房も、『神皇正統記』の中で、そのような政治形態を、日本の伝統的な政治形態として明確に認識していたが、このことは、明治新政府になってからでも変わりはなかった。だからこそ、明治新政府は、この伝統を活かして立憲君主政体を採用したのである。それが、日本の伝統に合っていたからに他ならない。

立憲君主政体は、主にイギリスにおいて、十七世紀以来、王権と民権との対立の妥協点として徐徐につくられてきたものであって、その結果、君主を権威の象徴とし、政府を権力の代表とし、共に法に従うようにした政体である。日本の天皇制は、ある意味で、そのような王権と民権との対立闘争を経ずして、古代以来、すでに平和裏に、この権威と権力の分業体制をつくりあげていたとも言える。しかも、イギリスの王朝は何度も交替しているが、日本の天皇制は、イギリスの立憲君主政体ができる以前から、それ以後にかけても、ずっと一貫して、同じ天皇の系譜によって支えられている。第一次大戦、第二次大戦を通じて、世界各国の多くの君主制が崩壊していることからみれば、これは、世界でも希有な現象だと言わねばならない。

わが国の場合は、国民の共通意志を私心なく映し出す鏡のごとき天皇が存続して、それが支点になっていたから、権力の部分で何度も政権の交替があっても、国家全体が收拾のつかないほど無秩序状態に陥ることなく、逆に、その都度その都度の危機にうまく対応して、政権の交替をやっていくことができた。幕末から維新にかけての徳川幕府から薩長藩閥政府への革命が成功したのも、そこに、徳川と薩長とに共通した権威、つまり錦の御旗の天皇があったればこそなのである。幕府がその権力を天皇に返し、その権力を薩長藩閥政府が受け取り直すという離れ技、つまり「大政奉還」という方式が編み出されたのも、危機に対して、天皇を支点にして柔軟に対処していくことのできる日本独自の政権交替方式があったからなので

ある。王朝が絶えず交替していたヨーロッパ諸国では、このようにはいかなかったであろう。

明治政府は、ヨーロッパ近代文明の襲来という未曾有の危機に対して、天皇を中心とした日本の伝統を存続させながら、これを近代に合わせて立憲君主制をつくり、独自の国民国家を形成した。ヨーロッパ諸国の場合には、近代化は自由民主主義体制の確立を意味していたから、どちらかと言えば、君主制は打倒されるか、あるいは制限されるかの方向を辿ったが、日本の場合には、逆に王政復古という形で伝統的側面が復活され、それがまた、同時に近代的な衣を身につけるということによって、日本の近代化を成功に導いた。近代化の場合でも、ある面では伝統の果たす役割は大きく、むしろ、伝統と近代のバランスをはかることによってのみ、近代化はうまくいくものだが、日本の天皇制は、その両方の役割を演じることができた。日本近代化に果たした天皇の役割は大きい、それは、天皇制のもっていた柔軟な側面、つまり、何ものをも映しとってかつその同一性を失わないという〈鏡〉としての面があったからである。危機を乗り越えるには、国民の一致団結が失われないということが必要であるが、この一致団結のための意志統合ができるものが、日本では天皇という形で維持されていたのである。

あの敗戦の危機でも、この構造は揺るがなかった。軍閥政治から民主政治への転換が天皇を支点にしてみごとになされ、占領軍の到来という未だかつてなかった危機を乗り越えることができたのである。その転換点になったのが、終戦の御聖断であった。昔から、日本は、国民の意志が例えば開国か攘夷かなどで分裂したときは、いつでも最終的には天皇を前面に出してきたのであり、いわば天皇という鏡に国家の行くべき方向を仰いできた。終戦か抗戦かで意志が分裂したとき、御聖断を仰ぐというしかたで意志決定したのは、伝統に適った智慧であった。しかも、聖徳太子以来、承諾必謹という決りがあったために、天皇の意志に対しては、皆が従い、従うことによって国民が一致団結できたのである。旧軍が整然と戦闘を停止したのもそのことによる。天皇は、このとき、ほとんど神秘的と言ってもよいような威力を発揮した。

それに対して、開戦のとき、なぜ、天皇は、戦争に反対であったにもかかわらず、これを止めることができなかつたのか、という疑問は以前から投げかけられてきた。だが開戦の折には、御前会議の方へ吸収されてきた国民の意志が、すでに開戦やむなしという方向に決定していたから、天皇は反対でも決断せざるをえなかつたのである。天皇は国民の意志を反映する鏡でなければならないからである。開戦の詔勅のなかに、日露開戦の詔勅にならって、「豈ニ朕カ志ナランヤ」という一文が天皇の意志を体して付加されたのが、わ



ずかに天皇の〈私心〉であった。昭和天皇は、この開戦の決断は、立憲君主制を決めた明治憲法の手続に厳格に従おうとしたためとお思いのようであったが、そこには、もっと根の深い日本の伝統的な共同体の意志決定方式があったとみなければならないであろう。

この点から言えば、天皇の戦争責任は、全面的にあると同時に全面的にないと言える。国民の全体意志に従わざるをえなかったのだから、責任はむしろ国民の方であって天皇にはないことになるが、同時にまた、天皇は最終責任者として全面的に責任をもつということになる。そういう矛盾した面をひとつに合わせもつのが、天皇なのである。

共同体の意志が分裂したとき、その分裂矛盾を克服する力をもつのも、天皇の矛盾の統合という働きによる。天皇は鏡であるがゆえに、分裂した意志をそのままに表現することができる。矛盾の克服の力も、この映しとるという作用から出てくる。

危機の時には、天皇がいつもその危機克服の支点になるという点は、日本の歴史で見逃すことのできない現象である。権力の部分で意志が分裂し、どうにもならなくなったとき、天皇が前面に出てきて、その権威の部分によって、日本人は危機を克服してきた。この面を特に取り出してみるなら、危機の折には、短期間ではあるが、天皇親政が行なわれてきたとみるべきであろう。天皇は、単なる象徴にいつまでもとどまっていたのではない。

事実、そのような危機は、古代にも幾度となくあったが、さらに、奈良遷都、平安遷都、建武の中興、幕末維新、二・二六、八・一五、と何度か繰り返されてきた。そのとき、大概、天皇が前面に出てきて、一種の親政が行なわれている。というより、国論が分裂して統一ができなくなると、自然とその背景にあった天皇という鏡がみえてくると言った方がよいかもしれない。日本の政治は、祭政一致の古代的形態から、かなり早い時期に、祭と政つまり権威と権力の二部分を分離してきたが、同時に、危機の時にはこれを統一し、危機克服と同時に、再び分離するということを繰り返して、日本の同一性を保ちつつ、柔軟に対処してきた。これは、日本人の政治的英知であったと言うべきであろう。

どの国にも、国家の同一性、連続性を保とうとする働きがある。そして、これは、多くの場合、その国の伝統的な生き方、信仰、慣習、智恵、経験、つまり文化によって維持されてきた。日本は、これを、天皇という生きた存在で一貫して表現してきたのである。王朝が絶えず交替していたヨーロッパやシナとは違って、連綿と続いてきたこの天皇の系譜によって国家の同一性を表現するというしかたは、日本独自のものであろう。その意味では、天皇は、ヨーロッパやシナの的な意味での君主でさえない。

## 天皇と神道祭祀

この天皇による国家の同一性の維持は、その究極の源泉を尋ねれば、歴代天皇がかかすことなく行なわれてこられた神道祭祀によるところが大きいであろう。天皇は、神々に対して絶えず国家と国民の平安を祈る祭司の役割を果たしてきた。天皇は神器を守り、己が統治する国家と国民の有様を己が心に映し出し、多様性をひとつに収斂し、崇敬する神々にこれを報告し、その統治の有様を己が心に反省してきた。この祭祀という行為によって、日本の同一性、連続性は保証されてきた。国家の源泉には、神聖なものがなければならないが、これが、日本においては、最終的には、天皇による神道祭祀によって保たれてきたのである。日本人が歴史的に受け容れてきた様々の宗教や教義や文明もこの天皇の神道祭祀によって統括されてきた。

神道は、必ずしも特定の宗教ではなく、むしろ、そこに、仏教も儒教もキリスト教も西洋近代文明も受容され、映し出される〈清明なる場〉である。神道の尊ぶ清明心が〈場〉となつて、あらゆるものが併存するという日本の柔軟な文化構造が保たれてきた。そして、また、この清明心は、しばしば鏡によつても表現されてきたものなのである。神道では、しばしば鏡が御神体となつてることが多いが、それは、日本人が昔から尊んできた〈清き明き心〉の象徴でもあった。三種の神器の中の八咫鏡も、これを表現する。日本人は明鏡のごとき清明心の中に、仏教の慈悲や空の教え、儒教の礼や仁の教えキリスト教の愛の教えさえ受け容れてきたのであり、明治になってからは、この〈場〉に西洋近代文明をも受け容れ、それらを併存させてきた。キリスト教でさえ、安土・桃山のころの普及は目覚しく、もしも、その背景にスペインやポルトガルの領土的野心が隠されていなかったなら、おそらく、キリシタン禁令は行なわれなかったであろうし、鎖国も行なわれなかったかもしれない。

日本人の精神は、そのように、何ものをも受け容れる柔軟心をもっている。明治になって西洋近代文明が押し寄せてきたときも、ある意味で純真な驚きと好奇心をもって、それを柔軟に受容してきた。社会主義や共産主義でも、この日本人の心の底にある鏡を壊さぬかぎりは併存しうるし、逆に社会主義や共産主義の日本化がなされ、換骨奪胎されてしまうこともありうる。

歴代天皇も、神道祭祀を励行されつつ、その鏡のごとき清明心の場から、儒教の他、ある時は南都六宗を擁護し、ある時は真言・天台を擁護し、ある時は禅宗を擁護されてこられた。よく高僧が皇室から国師号や禅師号を賜ったのは、その現われである。北畠親房も、天皇はどのような教義をも捨てることなく、広く知るべきことを説

いている。そのような精神のもとに、明治以後の皇室は、また、積極的にヨーロッパ王室の風俗習慣を受け容れ、日本近代化の模範にもなってきたのである。近代日本のキリスト教徒の一部では、天皇制をキリスト教信仰と両立しないものとみて、これを批判してやまないが、そのような教条的な独断がなかったなら、キリスト教たりとも、柔軟に受け容れられ理解されうる可能性はあったであろう。

天皇は、単に政治的な存在ではなく、むしろ宗教も含む文化的存在であり、神道祭祀を基盤にして、様々の宗教を統括し、それらを公平に擁護するものである。天皇は、なおひとつの鏡であり、優れて徳あるものはすべて映し、不徳な騒乱をも映して、それらの矛盾を矛盾のままに統合するものなのである。とすれば、天皇の行なわれている神道祭祀は、そこで政治、軍事、宗教、文化、あらゆるものが可能になる源泉として、日本文化の同一性を保持するための最も重要な行為ということになる。

天皇の営まれる一年の祭祀は、元旦の四方拝から始まる。天皇は、早朝、まだ国民が寝静まっているころ起床され、身を清め、衣冠を正し、神嘉殿の前庭で、皇祖皇宗および四方の天神地祇に国家と国民の平安を祈願される。私共下々の者が、寝正月を決め込んで暖かいふとんの中にもぐり込んでいるときに、冷氣身を刺す中、すでにこの儀式は始まっているのだから、これを欠かすことなく繰り返されてこられた天皇は、おのずと、私共国民以上にその心境は清められ、清浄無垢、明鏡のごとく曇のない心境に達せられていくのも不思議ではない。

天皇の一年の祭祀の中で、特に神嘗祭と新嘗祭は最も重要な儀式である。神嘗祭は、伊勢神宮の祭神である天照大神にその年の収穫である新穀を供え、五穀豊穰を感謝する儀式である。伊勢神宮で行なわれるこの大祭に、天皇は勅使を遣わされ、この勅使を通じて、自ら耕作しておられる稲田からの初穂を捧げられ、宮中でも遥拝の儀と賢所の儀を執り行なわれる。新嘗祭は、天皇がその年の新穀を神々に供え、五穀豊穰を感謝されるとともに、それを天皇自らが神々とともに食される儀式である。それらを見れば、これは、明らかに農耕民族として出発した日本人の収穫祭、感謝祭である。しかも、これは、単に皇室ばかりではなく、広く日本人の伝統的な習俗の中にも広まっているものである。皇室祭祀の中には、広く日本人の行なってきた民間の習俗の中にその源泉をもっているものが多いが、皇室祭祀は、いわばそれらの代表である。

新帝即位の折行なわれる新嘗祭、つまり大嘗祭は、通常の新嘗祭よりも大ががりに行なわれるが、その基本は変わらない。これらを常識的に解釈するなら、天皇はやはり神々を祀る最高の祭司であって、大嘗祭はその最高の祭司に就かれる儀式だということになる。

そのかぎり、天皇はやはり人である。

### 大嘗祭の秘儀

しかし、この大嘗祭の儀式をもっと注意深くみ、その忘れられた古い意味を取り出すなら、これは、天皇が皇祖神とひとつになり一体化する儀式であったのではないかと解釈することができる。

古代の大嘗祭には、新しく造られた大嘗宮の悠紀殿と主其殿の奥の室に、天皇となるべき皇子が籠り、そこに敷かれたしとねの上で天照大神の霊と同衾されるという儀式があったのではないかといわれる。この〈真床追衾〉の秘儀によって、いわば天照の霊が生身の皇子に乗り移り、皇子は天孫そのものとして生まれ変わり、天皇となると理解される。かくて、即位された天皇は、霊格において皇祖神とひとつであるということになる。天皇が古来〈現御神〉とみられたのは、このように、神が人となって現われ、人の肉体の中に神の霊が宿るという意味をもっていたのではないか。この点では、天皇は、人であって同時に神であるということになる。天皇の多様な側面のどちらに注目するかによって議論は分かれるが、少なくとも天皇は生身の人間であると同時に、神的な側面をもつ存在、あるいはそれに近い存在とは言うことができるであろう。ここでも、天皇は、神と人との矛盾を統合した存在だと言うことになる。

GHQの強力な要請によって出されたいわゆる天皇の「人間宣言」は、問題の多いものである。これをよく読めば、この詔勅は、むしろ「五箇條の御誓文」に立ち返って、天皇と国民がひとつになって新日本を建設しようという趣旨がほとんどを占め、わずかに、さきの軍国時代に天皇を現御神として民族の優越性を強調したのは間違いであったということが、ほんの数行で述べられているにすぎない。何も改めて「天皇は人間なり」と強調されているわけではないのである。天皇は、昔からずっと、一面、神を祀る祭司として、人間に変わりはないのであったのである。しかし、もしも、この「人間宣言」が日本的な意味での天皇の神性の完全否定であったのなら、いくらか問題はあろう。天皇には、他面、歴史的にみて神的な側面もあったし、少なくとも、ただの人ではなかったからである。

この天皇の「人間宣言」が出発点になって、戦後は開かれた皇室論が華やかになり、天皇家は、次第に、今日の大衆社会におけるあこがれの家族像のようなものにされていった。それが、戦後の民主的皇室論の結果であった。しかし、これでは、いわば最良の引き出しになり、価値あるものの引き下げになってしまう。

どこの君主でも同じであるが、君主はある程度開かれる必要があると同時に、また開かれてはならない面がある。君主は、人間的側面をもつと同時に、また、一種の神秘性をもっていなければならない

い。わが国の天皇の場合も、国民とひとつになって国家と国民の繁栄を目指すというような意味では、天皇は、国民の場に直接下り立ってきて、国民とひとつにならねばならない。戦後の御巡幸や今日の宮中園遊会などは、そのよい例である。これは、いわば天皇の人の面である。しかし、天皇はまたただの人ではなく、高貴な側面があるとすれば、この点では、天皇は、国家の最も神聖な部分として、なお神秘的な部分をもっていなければならない。そして、この国家の神秘的な部分は、天皇の営まれる祭祀によって代表されているのであり、この祭祀によって、日本の同一性、連続性が保証されているのである。その意味では、昭和天皇は、現代において最も純粹に日本的なるものを守ってこられた日本人であり、日本文化の最高の体现者であった。

この点では、皇室の祭祀が、開かれた皇室論や政教分離原則の拡大解釈によって乱されているのは、この文化の同一性が崩れているということであって、重大な問題である。天皇の祭祀やそれにまつわる神話は、確かに非科学的なものであるが、しかし、これをすべて非科学的・非合理的なものとして捨て去ってしまうことはできない。国家には、その最も深い奥底のところに神話がなければならない。その神話によって、国家の同一性は保たれ、この同一性のもとで、政治や文化、歴史的変遷の多様なものが可能になるのである。そして、この多様なものを、しかも、多くの場合矛盾する多様なものを、鏡として、この同一性の中に映し出し保持しているのが、日本の天皇なのである。